

震災学習スタディツアー2023 活動報告書

支縁 ～ 経験を伝承し、忘れない行動を



教育の敬愛
- 創立 100 周年 -

地域連携センター

(表紙)

宮城県名取市の震災メモリアル公園にある慰霊碑、「芽生えの塔」の前で、献花をして黙祷する学生たちの姿です。2011年3月11日、ここにはこの慰霊碑と同じ高さ、8.4mの津波が押し寄せました。海底の砂が巻き上げられ、真っ黒な津波が渦を巻いていたとの証言が、多数あります。私たちはここで、学んだことを語り継いでいく、という使命感を心新たにしました。表紙の上下2色の帯は、本学のスクールカラーである「敬愛レッド」「敬愛ブルー」です。

震災学習スタディツアー2023 訪問地写真集



名取市立関上小中学校



4年生とソフトパラフェンシングによる交流



「アンガルド、アレ!」の号令で



千葉の大学生が創ったレガシーをお届け



「関上の記憶」でお話いただいた丹野祐子さん



鳩風船に託した3.11のメッセージ



日和山の上から臨む関上の街



メモリアル公園で代表献花する学生

震災学習スタディツアー2023 訪問地写真集



大川小学校でお話いただいた只野英昭さん



津波の痕跡も激しい大川小学校の体育館



門脇小学校に残された消防車



特別授業までしていただいた鈴木洋子先生



日和幼稚園の慰霊碑にて



「はなちゃんのランドセル」と「けんとくんのジャンパー」



メモリアル公園に残されている歩道橋の一部



伝承館に残る、かつての関上の町並み

震災学習スタディツアー2023 活動報告書

支縁 ～ 経験を伝承し、忘れない行動を

Page	1	訪問地、行程
	3	団長総括
	5	参加学生のレポート
	29	引率者レポート
	30	参加者一覧



震災学習スタディツアー2023 行程

【1日目】2月9日(金)

- 6:45 稲毛駅(イオン稲毛店前) 集合
- 7:00 出発、千葉北IC~圏央道~友部SA、南相馬鹿島SA(休憩)を経て、名取ICまで北上。
- 13:15 名取市立閑上小中学校
日本ソフトパラフェンシング協会の協力による「千葉発祥・大学生が創ったパラスポーツを届けよう」プロジェクトとして、子どもたちとのパラスポーツ交流を実施。
5校時(13:45~14:30) 4年1組、6校時(14:40~15:25) 4年2組
- 15:45 津波伝承祈念館「閑上の記憶」
丹野祐子さん(一般社団法人閑上の記憶代表)から講話。
- 16:30 閑上プラザ
閑上中学校慰霊碑に献花
- 17:30 ホテルルートイン名取
到着後、夕食等自由行動
-

【2日目】2月10日(土)

- 8:00 出発、名取ICから仙台東部道路、三陸道を北上、石巻河南ICから市内へ。
- 9:30 震災遺構・石巻市立大川小学校
只野英昭さん(大川伝承の会)から講話。
- 12:00 いしのまき元気いちばで昼食。
- 13:30 震災遺構・石巻市立門脇小学校 現地踏査
鈴木洋子さん(震災当時、門脇小学校長)から講話。
- 15:30 震災伝承交流施設 MEET門脇
- 16:00 日和幼稚園遺族有志の会慰霊碑
献花
- 17:30 ホテルルートイン名取
到着後、夕食等自由行動
-

【3日目】2月11日(日)

- 9:00 出発
- 9:15 閑上地区現地踏査
名取市震災メモリアル公園にて献花。
その後、閑上の記憶、閑上朝市、メイプル館、日和山、かわまちてらす閑上、名取市震災復興伝承館などを自由踏査。
- 12:45 名取市震災復興伝承館駐車場 発
名取ICから、常磐道・圏央道を経て南下。途中、南相馬鹿島SA、友部SAで休憩。
- 18:40 稲毛駅(イオン稲毛店前) 到着、解散。

支縁～経験を傳承し、忘れない行動を

団長 地域連携センター長 藤森孝幸

2011年度から本学が続けてきた「敬愛大学宮城ボランティア(宮ボラ)」は、震災から満10年を期に「震災学習スタディツアー」という名称で継続されることになりました。名称が変わって2回目の宮城での活動に参加してくれた学生諸君や千葉敬愛高校の生徒1名に、感謝したいと思います。気がついたら、歴代の参加者はのべ300名を超えることになりました。



折しも出発1ヶ月前でもある2024年の元日に発生した能登半島地震では、ライフラインが寸断されたことによる救援活動の難しさが日々報じられると共に、自分たちにできることはないのかと考える姿勢が求められました。能登地方での状況の中には、東日本大震災を彷彿とさせるものも多々あり、学生たちにはこの機会をより自分ごとにしようとする姿が見受けられました。

これまでに参加してくれた学生たちの要望や共同研究でお世話になった先生方のご助言もとりいれ、今年度は大川小学校と門脇小学校を2日目の午前・午後で訪問することにしました。このような行程で語り部をしていただく方を探していたとき、大川で活動するある団体の代表者(学生諸君が大川



川小学校でお目にかかった只野英昭さんのご子息で、大川小学校を襲った津波で生還した、只野哲也さん)からは、「一日でこれら二つの学校を訪問すると、かなりの情報量で学生の皆さんが大変ではないか心配だ。それぞれの震災遺構の成果と課題を認識し、仲間と共に考えを深めるためにも、どちらか一方の訪問に留めてはどうか」との助言をいただきました。この助言を踏まえつつも、私たちは一日で二校を訪問する

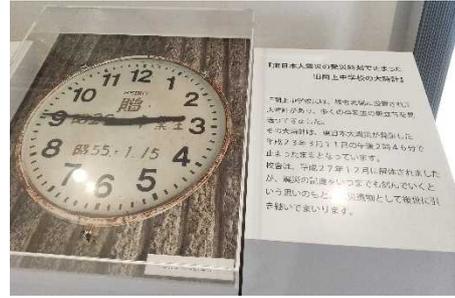
ことにしましたが、私たちの活動やみなさんの学びの質を高めるための助言と受けとめ、感謝しているところです。

また閑上小中学校でのソフトパラフェンシングによる交流事業では、最終日、出発前のバスに駆けつけてくださった長沼俊幸さん(閑上中央自治会長)が何ヶ月もかけて、名取市の皆様に我々の提案をお伝えいただき、実現に至りました(閑上小中学校にお孫さんがお二人通っているそうですが、4年生ではありませんでした)。長沼さんと私の出会いは2016年度の「敬愛大学宮城ボランティア」に遡りますが、以来一年を通じて長沼さんとは連絡を取り合う仲となり、敬愛大学の学生たちを見守ってくださっています。このように、敬愛大学の宮城県での震災学習は、多くの皆様とのご縁の積み重ね、すなわち「支縁」で成り立っていること、「敬愛大学さんが来るなら、ぜひ連絡してよ」と言ってくださることのなんと多いことかを、忘れないでほしいと思います。



ここで、今回の参加者についてふれておきます。今回の参加者25名のうち、21名は初めての参加です。一方、参加申し込みを受け付けた際の記録や本報告書のレポートを読むと、自分自身や家族が

東日本大震災で被災経験がある者が何人もいたことに驚かされました。学年も学部も入り交じり、様々な背景を持つ学生たちが参加して共に学んでくれたことで、意義深い学びに繋げることができたと思い、感謝したいと思います。また、引率に加わっていただいた脇黒丸先生は、法学者のお立場から、大川小学校訪問時には同校を巡る裁判の判例を紐解かれるなどの準備をされたと伺いました。学生たちと同じ目線で交流しながら、共に学んでいただいたことに感謝いたします。



本学がこれまでの取り組みでゆかりのある名取市閑上地区、そして石巻市の二つの小学校は、いずれも大きな地震と津波で多くの尊い命が失われた場所です。そのような現地での学びの成果が、次ページから掲載されています。ぜひ時間をかけて、お目通しいただきたいと思います。彼らは正に、「間接的な語り部」の一員です。

この報告書を手にした全ての方が、未だゴールのない東日本大震災の被災地の現状に思いを寄せ、また近年頻発している自然災害、能登半島地震や千葉県東方沖での群発地震などへの思いを繋ぎ続けてくださることを願ってやみません。

私たちが訪れた場所、伺った話は、どれも被災した街のことだけではありません。私たちが今いる街の「未来図」ですし、私たちが住む場所は「未災地」にすぎません。今は災害後ではなく、「次の災害の直前」に過ぎません。だからこそ、「敬天愛人」を建学の精神とする本学は、これからも宮城県をはじめとする震災被災地に学び続け、「支縁」と「伝承」を続けていく使命があると思うのです。

結びに、多くのご縁に改めて感謝と敬意を表します。

今回の企画実現にあたり、特に記して感謝申し上げます。

- ◆長沼俊幸 様（閑上中央自治会 会長）
- ◆神谷ゆたか 様、佐藤真一 様（名取市立閑上小中学校 校長、副校長）
- ◆佐藤明香 様、小野寺優万 様（名取市立閑上小中学校 4年生担任教諭）
- ◆高橋哲男 様（株式会社河北新報社 岩沼支局記者）
- ◆丹野祐子 様（一般社団法人閑上の記憶 代表理事）
- ◆只野英昭 様、鈴木典行 様（大川伝承の会）
- ◆鈴木洋子 様（元・石巻市立門脇小学校 校長）
- ◆高橋知子 様（京都大学東南アジア地域研究研究所 助教）
- ◆飯考行 様（専修大学大学院法学研究科 教授）
- ◆今田和人 様（尚絅学院大学 学生生活課）
- ◆公益社団法人 3.11 メモリアルネットワーク 様
- ◆株式会社ルートインジャパン 様
- ◆株式会社元氣いしのまき 様
- ◆株式会社西岬観光 様
- ◆日本ソフトパラフェンシング協会 様

震災から学ぶべきこと

国際学部こども教育学科 4年 大野実咲

東日本大震災から13年。最近では、3月11日にならないとメディアも報道されなくなったように感じます。今年の1月1日に起きた能登半島地震でも多くの人が犠牲になり、震災はいつ起きてもおかしくないし、そのための対策を日頃から知っておかなくてはならないと、今回改めて感じる事ができた。

3年ぶりに宮城県に訪れました。閉上の日和山に登った時、3年前に撮った写真と見比べると、3年前と比べて新しい建物が増え、新しい街が徐々に作られているように感じました。長いようで短い3年という期間でここまで変化したのか、と驚かされました。丹野祐子さんのお話の中では「歴史は繰り返される」という言葉が印象に残りました。津波が「一度来たからもう来ない」「私たちの所には来ない」と他人事のように考えるのではなく、この被災経験を経て、「次に津波が来る時にはどう行動すべきなのか」「自分の命を守るためにはどうすればいいのいか」を考えるきっかけにしなければならぬと感じました。そして、大切な人を亡くしたにも関わらず、今後の未来に向けて一歩踏み出している姿に感動しました。



初めて訪れた門脇小学校。地震や津波、火災に襲われたにも関わらずなぜ逃げられたのか、鈴木洋子先生のお話を伺って日頃からの行動が関係している事を知ることができました。日頃からしっかりと生活指導を行うことによって、緊急時も先生の指示を聞くことができたり、地域の方と連携することが出来たり、学校の中だけではなくその地域の地形や特性を知るなど目的を持つことが大切なのだを知ることができました。そして、この4月から教師として小学校の教壇に立つ身として、教師としての自覚をもち、迅速に対応できるよう日頃から努力を重ねていこうと強く思いました。

テレビや本などでは知ることのできない、実際の被災場所に足を運び、自分の目で見て、地元の方から話を聞くことで、より自分事として考えるきっかけに繋がった今回のスタディツアー。一度ではなく何度も行くことで変化を感じることもできることを知ったので、またきっと訪れようと思いました。

【私の一枚】

2月10日に訪れた大川小学校で撮影した写真です。この学校の周りには当時多くの家があり、住宅街でした。この光景を見た時、とても信じられませんでした。なぜこの裏山があったにも関わらず登らなかったのか、なぜ多くの子どもや教師の命が奪われなければならなかったのか、教師になる身としてとても考えさせられた場所となりました。



自然災害の認識とは

国際学部こども教育学科 4年 菊池七海

この震災学習スタディツアーに参加するのは、2回目です。今回は、前回でしかなかった門脇小学校への訪問があり、当時の校長先生からお話を伺えることを知り、参加することにしました。

今回のツアーで一番印象的だったのは、大川小学校と門脇小学校での語り部の方のお話です。この二つの小学校は、どちらも水際に近く、またすぐ近くに高台があるという共通点があります。しかし、東日本大震災でとった避難行動が大きく違いました。この違いはなぜ起こってしまったのか、命の守り方、平日頃の行動などたくさんのことを学びました。またその違いをなかったこととするのではなく、きちんと目を向けて、次にくるであろう大震災に備える必要があると考えました。

そのためには、震災の怖さを知る事で他人事ではないという感覚を養うことが大切だと思います。ニュースやSNSを通じて沢山の情報を容易に手に入れられる現代ですが、見るだけでは自分事として考えられる限界があると思います。元旦に起こった能登島半島地震でも、「自分の住んでいる街は大丈夫だから」と言って、家族が避難をしてくれないというSNSでの投稿を見かけました。ですから、



震災に対する意識を一人ひとりが上げなければいけないと強く思いました。

今回のツアーで学んだことを、自分の中だけでなく、家族、友人など沢山の人たちに伝えていきたいと思っています。今回のツアーでは知識に加えて、行動まで出来る力や判断力の大切さについても学びました。逃げる手段や時間があっても、日常に渦巻く問題に囚われずに、命を最優先する時の行動が自分に出来るか、も考えることができました。

震災のように自然災害が発生すると、大変ですし悲しいものです。いざという時に悲しまなくていいように、命が助かったことを奇跡ではなくあたりまえだと感じられるように、今回学んだことを大切にしたいので、まずは自分のよく知る街で実行してみたいと思います。



【私の一枚】

2月10日に、大川小学校の裏山から撮影したものです。全景を望みながら、児童、先生方それぞれの気持ちについて考えていました。ここでどんな子どもたちが毎日を過ごしていたのか、と想像しながら見学させていただきました。



震災学習スタディツアーに参加して

国際学部国際学科 4年 澤木翼

卒業直前の震災学習スタディツアーに参加し、2泊3日と短い期間でしたが、自身の価値観が大きく変化したと感じました。参加してからの価値観の変化や気づきが、3点あります。

1点目は、目の前の物事を自分だったらと考えるようになっていた点です。今回の活動に参加するまでは、震災の事も含め、自身が経験していないことは、どこか他人事で考える癖がありました。自分には関係ないだろうと心の中で決めつけていた事が原因です。しかし、活動に参加してからは、関係ないだろうという心構えが人を危険や恐怖に晒してしまうのだと気づきました。「明日は我が身」という言葉があるように、どんな問題も自分事として捉えていきたいと思えます。

2点目は、普段通りの生活を送れることは、幸せなことだという点です。人とは幸せになりたいという欲求からお金を稼いだり、何かを欲し続けたりします。自分もそうでした。しかし、本当の幸せとはいつも通りの日常を健康にすごせることなのだと、被災した方々のお話を聞いて実感しました。「失ったものは戻ってこないから、今を後悔なく生きて欲しい」という言葉がとても印象に残っています。「目の前



のことをどのように感じ取るのか」、それが生きる上で大切だと気づきました。

3点目は、「縁」を大切にという点です。今回、就職する会社の関係から、とりあえず勉強になりそうだと突発的に参加を決めました。しかし、参加してみると仕事の学びだけでなく、人としての生き方や災害との向き合い方など多くの学びを得ました。また、数少ない高校の後輩にも活動の中で出会うことができ、多くの縁があって今回の活動が成立したと感じています。来年から営業職として勤務するので、多くの縁を作れるように、そして周りを支えていける立場になれるように努力していきます。

【私の一枚】

津波の被害にあった石巻沿岸部を訪問した際の写真です。一見普通の風景に見えますが、この地区一帯の地下にインフラで使われているパイプやホースが埋まっています(写真右下部分にも映っています)。私は4月から、これらを製造している化学メーカーで働きます。震災の被害に遭われた方々の話を聞き、「ここで生活する人々の当たり前を作っていきたい、復興を支えたい」と強く思いました。自分の働く意義や労働に対する価値観が変わった瞬間でもあります。



学びの多かった震災学習スタディツアー

教育学部こども教育学科 3年 土居真理

私がこの震災学習ツアーに参加した理由は、教育ボランティアや教育実習では直接的に学べない学校防災教育を学びたかったためです。この3日間で命の大切さや災害時の対応の仕方を学ばせていただきました。語り継いでいただいた方々に感謝します。



1日目で訪問した閑上小中学校では子どもたちとパラスポーツ交流を実施し、誰でも楽しめる喜びを実感することができました。その後に行った「閑上の記憶」では、震災の悲惨さや固定概念を持たず自分の意志を持ち行動することの大切さを学ばせていただきました。情報を鵜呑みにせず、自分で調べ考えていくことの大切さを知り、まずは自分の住む土地について理解していくことから始めていきたいと思いました。

2日目に訪問した大川小学校は、犠牲者の慰霊・追悼の場であり、震災での出来事や避難の重要性を理解するとともに、防災や減災、判断や行動で守れる命について考える防災教育の大切さを学びました。只野さんにお話を伺い、今まで知らなかった行政や教育委員会がとった行動のことや、教員が組織として十分に協力できていなかったことなどを学びました。自分が教員になったら二度とこのような悲惨なことを起



こさないためにも、ここで学んだ防災教育の大切さを児童だけでなく教員同士でも共有し、学校全体で取り組んでいけるようにしたいと思いました。その後に行った訪問した門脇小学校では、津波火災による被災状況を残しつつ、平時における訓練の重要性や避難の在り方を学びました。多くの学校では第二次避難までだが、門脇小学校では第5次避難までと先のことを考えておりこれからの防災教育について考えていかなければならな

いと思いました。

児童の人格形成を支える教員は、児童の安心安全を保障していかなければならず、そのための知識を体験的に学べて良かったです。また帰宅途中当たり前だと思っていた住宅の多さに驚き、安全に暮らせる日常に感謝したいと思いました。

【私の一枚】

2日目に訪問した大川小学校の写真です。大川小学校は津波が川からと陸から襲ってきて、多くの方が犠牲となりました。私たち敬愛大学生は訪問し、震災の悲惨さや守れる命をどのように守っていけばいいのかを考える機会をもらいました。その経験を今後の人生で生かして語り継いでいくことが大切だと学ぶことができました。



震災学習スタディツアー-2023に参加して

教育学部こども教育学科 3年 中山隼

東日本大震災から早13年がたとうとしている中、今回のスタディツアーに参加しました。教育実習や「たまご!プロジェクト」の際に児童に話を聞いたところ、東日本大震災を経験していないことが分かり、あの悲劇をしっかりと伝えていかないといけないと思ったため、今回参加させていただきました。

語り部の話を聞いていて思ったことは、大人の影響力、教師の影響力は、児童だけでなく地域の人にも影響するという事です。二つの小学校を訪問し、一方では助けられる多くの生命を失ってしまい、もう一方では日頃の訓練通りに避難したことで多くの生命を助けることが出来たことを知りました。そしてこの違いを生んだのは、普段の学校生活の差であることもわかりました。しっかりと訓練をしているつもりでも、いざ大きな地震が来た時に行動ができなければだめだということもわかりました。生命を守ることがどれだけ大変なのかも、実際に学校の被害状況を見て知ることができましたし、見聞きした以上に想像できないくらいの思いを受け取ってきました。



今年の元日に起きた石川県での大地震も、このタイミングで来るのかと思うほど唐突なものでした



ので、いつどのような状況で襲いかかってくるかわからない自然災害に備えて、普段からどうするかを考えながら行動しなければならないということも学びました。助かったことを美談で納めるのではなく、多くの生命を救い、受けてしまった被害を受けとめ、次につなげることが大切だということもわかりました。

災害は一瞬にして街や日常を奪っていくものであるということを改めて実感したスタディツアーでした。私の実家(千葉県館山市)は海から近いところがあるので、大きな地震があったらすぐに逃げること、また家族とどこに逃げるのかも確認して自分の生命をしっかりと守ること、そして一人でも多く助けられるように率先して動けるように、日々の生活を送っていきたいと思います。

災害は一瞬にして街や日常を奪っていくものであるということを改めて実感したスタディツアーでした。私の実家(千葉県館山市)は海から近いところがあるので、大きな地震があったらすぐに逃げること、また家族とどこに逃げるのかも確認して自分の生命をしっかりと守ること、そして一人でも多く助けられるように率先して動けるように、日々の生活を送っていきたいと思います。

【私の一枚】

2月9日に訪問した閑上の記憶の展示品の写真です。実際に被害を受けたロッカーで、本当にここまで津波が来たのだと実感しました。他にもここに学校があったのだとわかる品物があり、心が痛くなりました。津波が来たという事実は一生変わることがないため、しっかりと伝えていかないといけないと思い、写真に収めました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 3年 藤本治美

私は初めて震災学習スタディツアーに参加し、震災の恐ろしさと学んだことを今後どのように活かすことができるかを考えることが出来ました。

1日目は、名取市閑上にある小中学校の児童と、パラスポーツ体験と一緒に体験しました。真新しい学校はとても綺麗でしたが、この街にかつて小学校と中学校があり、それらが震災により建て直さねばならなかったのだという事実を、忘れてはなりません。一緒にパラスポーツを行う際にどの児童も楽しく活動出来たようで嬉しい気持ちになりました。「閑上の記憶」で動画を視聴し、日常が消えることの恐ろしさを知りました。また、実際に災害にあった方の話をお聞きし、「ここには津波は来ない」という思い込みが被害を悪化させた原因だと知りました。私も将来、教員を目指しており、思い込みで行動することは絶対にしないと思いました。



2日目では、石巻市で当時被害にあった、大川小学校と門脇小学校で話を聞くことが出来ました。教員による判断ミスが原因で多くの犠牲者が出るということ、教員は子どもの命を守ることを絶対に忘れてはいけない、と改めて学ぶことが出来ました。状況に合わせて避難をすることや情報を共有し



あうことがとても大切だということが分かりました。大人の判断が近くの子どもの命を左右するからこそ、普段から災害への対策は必要だと感じました。

3日目は閑上地区での自由行動でした。復興した閑上朝市を歩きながら、他に被害にあった方の話を聞きました。一人ひとりの人生があったことを実感し、この悲しみを繰り返さないようにしようと思いました。

3日間を通して、教員になったら避難訓練の大切さや授業で災害について学ぶためにどのような工夫が必要なのか、保護者との連携も徹底していきたいと考えました。また、災害について学ぶだけでなく、復興に向かう宮城の街をめぐり、とても貴重な経験をする事が出来たことに感謝しています。

【私の一枚】

この写真は、2日目に大川小学校に行った際のもので、この写真を撮影した場所（裏山の高台）にいれば救われた命があったはず、この1枚は私にとって教訓のような写真だと思い、選びました。今回、学んだことをどのように活かすかを考えることが、これからの私が考え続けていくべきことだと思いました。



新たに学び、そして語る

教育学部こども教育学科 3年 藤森朋幸

父と宮城を訪れてから1年が経ちました。新たな学びを得ること、他者と語り合うことを目的に今回参加しました。以下その2点について述べます。

新たな学びは2点あります。1つは広い平地は、以前は住宅街であったということです。今は大川小学校周辺や閑上は平らな土地になっています。しかし、双方とも住宅街であったことを語り部や資料を通じて知りました。広い平地、整備された道路の裏には、私の住む町と同じような営みがあり、それらが一瞬で奪われたことがあることを実感しました。

もう1つは、求められる教師の姿です。大川小学校では、事実を曲げようとした大人の存在や教師の判断ミスで多くの尊い命が奪われました。一方で門脇小学校では、縦割り活動や話を聞く姿勢、素早く整列するといった有事の際に生かせる活動に力を入れていたことを知りました。また、教壇を橋や梯子代わりに使用するという咄嗟の判断によって助かった命があったことを知りました。災害時に役立つ指導の仕方や自分で考えて行動まで移す力、咄嗟の判断力を身につけ、今後実践したいと思います。



他者と語り合うことでは、東日本大震災の様子や自分ならどう行動するかを参加学生と語り合いました。当時小学生や幼稚園生だった私たちは、何が起きたかわからなかったがニュースで津波を見てやっとわかった、ランドセルを机代わりに道路で宿題をやった、お風呂に水を貯めたなど、話を聴いて当時の様子が鮮明になってきました。また、この坂をどう登るか、マニュアルはどうしたらいいのか、多くのことを語り合いました。語り合うことで自分が知らなかった出来事や考えに触れることができました。

3日間に見たこと、聴いたこと、語ったことを自分自身に留めることなく、このツアーに参加していない色んな人に伝えたいと強く思いました。二度と同じ過ちを繰り返さない、当時の出来事を風化させないためにも、これから語り継いでいきます。

【私の一枚】

大川小学校での只野さんの語り部を聴いている様子です。ここでは市の教育委員会や教員が事実を隠蔽したことが語られました。二度と同じ悲劇を繰り返さないためにもこのような出来事も語り継いでいくことが大切であり、教師にまず求められるのは「誠実さ」であることを実感しました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 3年 三浦遥星

震災スタディツアー2023に参加して、自然災害の恐ろしさと防災教育の重要性を学びました。私が住む千葉県旭市は、東日本大震災で津波の被害を受けています。被災後に現地の様子を見ましたが、家が流され、土砂と崩壊した家の破片で地面が埋め尽くされていたのを覚えています。しかし、津波がどのような特性をもち、街を飲み込んでいくのかは知りませんでした。この震災スタディツアーを通して、津波の威力を知ると同時に、高台へ逃げる必要性や地域の人々と正しい情報を見極める力が必要だと感じました。また、大川小学校でのお話を聞いて、自分の考えを他者に表現する力も大切だと考えた。自分がなにをすべきなのかを状況に応じて判断し、言葉にすることが自分や周りの人の命を守る意味でも重要だということです。



小学校教員の視点で考えてみると、実際に地震が起きた際にスムーズに行動するためには、日頃から学校で行われる防災教育が重要だと感じた。廊下は走らないこと、人の話はしっかりと聞くことなどといった基本的な指導の積み重ねが、いざという時に命に関わると実感しました。自分が住む地域



や配属された小学校の地域の特徴をしっかりと把握し、常に震災時のイメージを身につけておく必要があると思います。

この震災スタディツアーで学んだことを周りの人や後世へ伝えることが、震災で亡くなられた方やこれからの時代を生きる尊い命を守るためにしなければならないことだと考えます。私自身も将来教員の職に就いたときには、命の尊さや何気ない日常の大切さ、防災意識を高める教育などを、子どもたち

に伝えていきたいと思っています。

〔私の一枚〕

下の写真は、2月10日に訪問した、震災遺構・大川小学校の写真です。鉄筋コンクリートの崩壊具合から津波の威力を身近に感じることができた。鉄筋コンクリートの柱が折れる程の威力だったと知り、正直言葉を失ってしまいました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 3年 若山遥樹

東日本大震災は、私の想像を遥かに超えるほどの大きな被害をもたらしていました。例えば、長い年月をかけて人々が築き繋いできた小学校や街を、一瞬にして消し去ってしまうほどのものであったということです。この震災では、大きな揺れだけでなく、大きな津波の被害にも遭っていました。そして、多くの人の命も奪っていきました。



このスタディツアーを通して、4名の方から東日本大震災についてのお話を聞くことができました。震災の恐ろしさ、人間の闇、日頃からの訓練の大切さなど沢山のことを学ぶことができました。その中で特に印象に残っているのが、門脇小学校での鈴木先生（当時の校長先生）による講話です。門脇小学校は海に近いにもかかわらず、在校中の児童全員が避難することができた小学校です。これは日頃から避難訓練がしっかりされていたこと、先生方の判断が素晴らしかったことが理由なのだと感じました。完璧な避難をするには、十分な避難訓練が必要であり、避難訓練を行うには、その土地を知り尽くすこと、第三次避難よりも先の避難訓練を行うことが重要だと学ぶことができました。



震災があったあの日、私は小学2年生で帰りの会の途中でした。私の住んでいる町（千葉県山武郡九十九里町）は海沿いの町で、津波の被害にあった地域もありました。千葉でさえ被害はあったのに、石巻市の被害状況を見て自分の想像よりも遥かに大きく、衝撃を受けました。鈴木先生が仰っていたように、避難訓練の重要性を改めて考えさせられました。また、避難訓練は命を守るための訓練であるため、ただやるのではなく、実際に災害が起きたときのことを想像しながらやるのが重要だと考えました。どの地域の職場になっても、まずはその地域の特徴を把握し、安全を確保するために地域と一丸になることが大切なのだと学ぶことができました。

【私の一枚】

最終日に閑上地区での現地踏査を終え、出発前に撮影した写真です。この写真にはバスドライバーさんや、このスタディツアーに参加しようと声をかけてくれた先輩と同級生が写っています。藤森先生をはじめ、参加のきっかけをつくってくださった先輩など様々な人のおかげで今回のような深い学びを得ることができました。



震災学習スタディツアーに参加して

国際学部国際学科 3年 市田ゆり奈

今回のツアーを通して、参加する前と後で災害に対しての気持ちが変わりました。テレビ等で震災のドキュメンタリーや映像を見たことがありましたが、実際にそれが起こった場所に足を運び、当時のままになっている建物を見ると、強く衝撃を受けました。実際の津波の到達点をいろいろな場所で見、津波の爪痕を肌で感じました。津波が自分の身長よりもはるかに高く押し寄せたことや、高い水圧であらゆるものが流されたということを考えたらとても怖くなりました。地震だけではなく、その後の二次災害、三次災害のことも考え行動をしなくてはならないと感じました。



多くの方にお話を聞いて、私は普段の生活からでもできることを見つけました。それは自分の暮らしている家や大学など自分がよくいる場所の避難場所や避難経路などを考え、どこが安全なのか考えること、それを家族や身近な人たちで共有していくことが大切だと考えます。また普段の生活から自分の意見をしっかりと持ち、自分の正しいと思ったことは他人の意見に流されずに行動し、自分の行動に責任を持ちたいと感じました。



大川小学校と門脇小学校に行って共通して感じたことは、自分自身でしっかり地震や災害について知識を持つこと、できるだけ高い場所へ逃げるということです。関東地区では、地震が起きた時、「津波が起こるはずがない」と思っている方が多かったために逃げ遅れた人も多かったと聞いて、災害が起きたら自分の頭の中で災害を決めつけずに高台に避難したいと感じました。また、東日本大震災が起きたことをいつ

までも忘れては行けません。私は関東にいて実際に津波の被害にあっていないですが、二度と同じ被害には遭わないように対策はできると考えました。だから今回学んだことをさまざま人達に伝えて行くことが大切だと思います。

関東でもいつ災害が起こるかわからないので、今回のツアーで得た経験をもとに普段から対策をし、一人でも多くの方が長生きできるような社会にしていきたいです。

【私の一枚】

2月10日に訪問した大川小学校での写真です。ここには山の斜面から見た大川小学校が写っています。地震が起きた時にいち早くここに避難していれば助かった人達が多いという事実を実際に目で確認してきました。この写真を見る度に地震が起きたら高いところに逃げようという意志を持っています。



震災学習スタディツアーに参加して

国際学部国際学科 3年 内海愛展

2011年3月11日の東日本大震災は、甚大な被害をもたらしました。私たちは、被害をもたらした街の一つである名取市閑上を訪れました。かつて5,000人以上の方々が住んでいたという街は更地となり、閑上中学校では14名の生徒が犠牲となってしまいました。閑上中学校はこの日卒業式。地震が発生し校舎に避難した地域住民はおよそ850人いたそうです。当時の全校生徒はおよそ150人でした。しかし、この学校には生徒は20人ほどしか避難してきませんでした。その後2年生の男子生徒が見つかったと連絡があり、一人またひとりと遺体安置所で生徒が見つかり、最終的には14人の生徒が犠牲になってしまいました。そして宮城県内で最も多くの犠牲者が出た中学校になってしまいました。震災から1年が経った2012年3月11日、閑上中学校遺族会は学校の敷地内に慰霊碑を建立しました。私たちは現在の閑上小中学校の隣に移された遺族会の慰霊碑を訪れ、ご冥福をお祈りすることができました。



石巻市内の大川小学校では、津波にのまれ、全校児童の約7割が亡くなってしまったそうです。すぐにスクールバスを使わなかったことや避難行動の遅れ、避難先の判断ミス、そして平時に避難訓練をしていなかったことで、これほどまでの被害が出たのだと考えられます。対して、同じ石巻市内にある門脇小学校では、避難訓練を丁寧に行っていたことや学年を超えた関係性が出来ていました。加えて先生の指示が通りやすい生活指導が行われていました。そのため、避難時も落ち着いて行動し、上級生が下級生を気に掛けるなど助け合いが出来ていました。

これらのことから、何事も自分事と捉え真剣に行動する事、また学年や年齢を超えた関係性も大切にすることが重要であると改めて学びました。日常的な心掛けや生活が、緊急時の行動に結びつのだと考えました。これらの教訓を活かし、何事も意味があるのだと捉え、真剣に行動していこうと思います。

【私の一枚】

2月10日に訪問した石巻市立門脇小学校の1枚です。火災が発生し椅子や机の骨組みだけが残っていました。被災後に残った実物を始めてみました。実際に震災後に残った事物を見たことでより東日本大震災の凄惨さを再度感じました。的確な判断や、迅速に行動することにより助かる命もあるのだと分かりました。



震災学習スタディツアーに参加して

国際学部国際学科 3年 飛田萌子

東日本大震災当日、私は岩手県沿岸部にある小学校に通う2年生でした。震災後、私の地元は復興を進めていたため、今はほとんど震災当時の建物などは残っていません。そのため今回のスタディツアーに参加し、被災した地が復興事業でどのように変わっているのかを知りたいと思い、参加しました。



3日間を通して、2日目の活動が私の中で特に印象に残りました。はじめに大川小学校の現地踏査に訪れた際には、恐ろしいほどの津波の威力のことや、当時の子どもたちが裏山に避難しようと先生に働きかけていたことをお聞きし、ちゃんと避難していたらたくさんの命が助かったはずなのにと心が痛くなりました。また、責任を逃れるために当時の校長先生などが隠蔽工作をしていたのではという話はとても腹立たしく感じました。只野さんの話はどれも心に刺さるものがありましたが、一対一でお話をさせてもらった際には、私が津波で母を亡くしたこともあり、今になって私が気に病まないようにと、アドバイスをしてくれました。



次に訪れた門脇小学校では、津波の被害にあった校舎の中を見ました。私の地元では被災した建物は危ないから立ち入ってはいけないということもあり、初めて悲惨な状態の建物を見ました。当時の校長の鈴木さんのお話は、当時の経験から自分たちが生き残るためにはどのようにすべきか、その時折で臨機応変な対応が必要なことを学ぶことができました。

3日間かけて被災した場所を回り、被災した方のお話を聞くのは、被災した当時を思い出してしまうのでとても苦しかったです。ですが、参加をしてよかったとも同時に思いました。お話を聞いてみて「経験則では語れない」ということが教訓だとわかり、実際に地震や津波を経験しないと分からないことを語り部などで語り継ぐことで助かる命が増えるとも分かりました。

今後、今回の参加経験を活かして、辛い思いをした方のお話を聞くなど、私自身も誰かの心のケアができる人間になりたいと思いました。

【私の一枚】

2月10日に訪れた、MEET門脇（石巻市）での写真です。ここを訪れた人たちが、「被災時のあなたならどうする」という質問に答えている付箋が写っています。津波や地震を経験したからこそそのコメントがあり、自分の考えとは違う新しい考えを得ることができました。また、家族を第一優先に考えているコメントが多く、心が温くなりました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 小野美智子

2011年3月11日に東日本大震災が起きてから12年11ヶ月、初めて宮城県を訪れました。幼少期にテレビで見た被災地は、家や車が次々と流され、人々が屋根の上で一夜を明かすなど、とても恐ろしい光景でした。それでも今回の震災学習スタディツアーに参加する前は、震災に対する知識が乏しく、地震が来ても「まあ、このくらいの揺れなら大丈夫か」と過信しすぎていました。しかし、3日間多くの方々からのお話を聞き、私は震災に対する意識が変わりました。



今回の震災学習スタディツアーで一番印象に残ったのは、石巻市にある門脇小学校についてです。門脇小学校の校舎には1.8mもの津波が襲い、自動車や漁船のガソリンなどから引火した津波火災の被害が甚大だったそうです。しかし、門脇小学校は「いつもの訓練通り」の避難をし、児童・職員全員が無事に津波から逃れることが出来たといいます。高台の日和山公園に避難をした後も、縦割り班活動で得た経験を活かして6年生が1年生の面倒をみるということが自然に起きたのだそうです。この話を実際にお聞きした際、学校での「避難訓練」、「縦割り班活動」、



「日常生活」の3つがとても重要で、このような災害の際にも役に立つ活動なのだということを学びました。また、避難訓練もただ校庭に避難しておわりだけではなく、自分の住む場所、いる場所に合った避難場所を知ること、二次・三次避難場所も考えていなければならないということを学びました。

今回のツアーでは、津波の恐ろしさや震災についての知識を改めて学ぶことが出来ました。今の小学生は、東日本大震災を誰も経験していません。このような悲惨な出来事は、決して忘れることなく、今回のような機会を得られた私たちが後世に語りついでいくことが、今の私たちに必要なことなのだと感じました。

【私の一枚】

この写真は、2月9日に名取市にある閑上小中学校に訪問した際、4年生の児童と先生がパラフェンシングを行っている様子です。小中一貫校の閑上小中学校は校庭も教室も大きかったです。子どもたちは、勝ち抜きで試合をしたり、先生と戦ってみたりと始終楽しそうに活動してくれ、そのような姿を見ている自分も嬉しくなりました。



2つの小学校から考える、避難の大切さ

教育学部こども教育学科 2年 加藤凜花

今回、2度目の参加となる震災学習スタディツアー。今回も多くのことを学ばせていただきました。今回印象的だったことは、大川小学校と門脇小学校という2つの震災遺構を訪問できたことです。この2つの小学校は、震災による被害をただ物語るだけでなく、「避難」の大切さを教えてくれるものだと感じています。



まずは東日本大震災の報道でよく耳にした、大川小学校。いつか訪れてみたいと思っていました。大川小学校は、児童74名と教職員10名が犠牲となりました。犠牲者の数だけでなく、校舎の姿も津波による被害の大きさを伝えてくれているようでした。お話をしてくださった只野さんは、大川小学校の生存者の1人である息子さんの話と共に、当時の学校の避難状況を語ってくださいました。お話の中に出てくる職員の対応は疑問だらけで、頭の中は「なぜ」でいっぱいでした。教員が一番に考えることは、児童の命ではないのだろうかと思いました。今回は遺族の方のお話だけでしたが、あの時、大川小学校の先生方がどう考えていたのか聴いてみたいと思いました。



門脇小学校では、当時校長先生だった鈴木洋子先生がお話してくださいました。門脇小学校はほぼ全員が助かりました。また、門脇小学校の避難の様子で町の人達も門脇小へ避難したそうです。お話を聞いて感じたことは、避難行動の素早さです。いつもの避難訓練通り避難したそうですが、その「普段通り」ができたからこそ、ほとんどの児童が助かったのだと感じました。鈴木先生は、「避難訓練はそのときだけでなく、普段の生活から指導することが大切だ」と仰っていました。避難訓練を「当たり前の行動」にすることがとても大切だということを学びました。

「地震・津波避難」についてどれだけ理解しているかが生死を分けるのだと2つの小学校から学びました。防災教育を学び、教員としてできることを考えていきたいです。

【私の一枚】

大川小学校の2階渡り廊下の柱の写真です。

大川小学校は鉄筋コンクリートでできているそうですが、この写真では柱の内部の鉄筋が引きちぎられているのが見えます。津波の威力を目の当たりに、身震いがしました。鉄筋がちぎれるほどの大きな津波が大川小学校を襲い、多くの尊い命が奪われてしまったのだと改めて感じました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 城之内妃奈乃

震災スタディツアーに参加して、様々なものを見て、聞いて、感じる事ができました。

1日目のバス車窓から福島県内の帰還困難区域を実際に見て、今までは他人事のように感じていたことを実感しました。この地は、かつて住んでおり戻ってきたいと願っても戻ることが許されない故郷になってしまったのだと感じました。その後、訪れた閑上小中学校では、明るく元気な子どもたちや先生方の様子が印象的で、震災の大きな被害をうけたものの、その後の復興事業により楽しく新たな日常があることに感動しました。



2日目は大川小学校にて、只野さんのお話を聞きました。大人の勝手な事情で子供たちを危険にさらし、多くの命を奪い、その後、その事実をもみ消そうとしていることを知り、本当に教育者がそのような人たちでいいのか、怒りを覚えました。また、学校の状況は本当に衝撃的で、あの日、一瞬にしてここにあった全てのものがめちゃくちゃになってしまったのだと感じ、何も言葉が出ませんでした。

その後訪れた門脇小学校では、立地を考慮し、普段の避難訓練から三次避難まで行っていたと聞き、驚きました。「命を守るための避難訓練」が形式的にならないように工夫が必要であることを実感させられました。そのためには、子供たちも「命を守るための避難訓練」ということを自覚し、行動することが重要だと思いました。



3日目の自由行動では、閑上地区に瓦礫で作られたオブジェの展示を3つ見してきました。これは、令和2年に作られたものにも関わらず、管理が不十分で、がっかりさせられました。

震災瓦礫を少しずつ集めて作られたもので、今、その地で暮らしている人はあの日そこで暮らしていた人ではないかもしれません。しかし、今、その地で日常を築いていた人たちも、かつて、その地で今は大きく違う「日常」があったことを想い、かつての日常の一部である、瓦礫の展示を、そのパーツ一つひとつを大切にしたいと感じました。

【私の一枚】

これは「閑上の記憶」の入口にあった教室用の机です。当時、実際に閑上中学校で使われていたと思われる机に、犠牲になった子どもたちへのメッセージや、残された私たちに出来ることなどが綴られており、訪れた我々もグッとくるものがありました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 林香菜子

初めて震災学習スタディツアーに参加して私は、東日本大震災の被害を実際に感じる事ができ、自分が知らなかった多くのことを学ぶことができた。1月1日におきた能登半島地震により、地震の恐ろしさを再び感じたことから、日本という国は地震大国であることを再確認し、今回の学習を活かして生活していくことが望ましいと思った。そこで、お話を伺うことができた2つの小学校に着目して、どのように活かしていけるのか考えたいと思う。



大川小学校では衝撃的なお話を伺い、津波の被害に加えて人間の行動による災害が大きかったと学んだ。特に印象に残った内容は、人の命よりも校長といった大きな権力にしたがってしまっていたことである。災害がおきたときは、人命最優先で考えて行動することが大切だと改めて実感した。震災後の政府の対応も、どのような考えでそのような対応をしたのか疑問に思うところが多く残った。

門脇小学校では事前の準備と心構えが大切であることを学んだ。学校と地域が協力しあうことで、津波や火災といった被害はあったが、多くの命を失わずに済んだことから、さまざまな生きる教訓を残



してくれているように感じる。縦割り班での活動や避難訓練など、習慣化してしまうのではなく、なぜ行うのか意味を常に考えること、実際に動けるようにすることが大切だとわかった。

この2つの小学校から私は、教員の災害に対する意識や地域との連携が鍵となってくると考える。教員の意識については、自分を含めて児童生徒の命を最優先に考え、その土地の特性から最適な避難経路を考え、まわりの教員と協力することが望ましいと思った。地域との連携については、災害への対応の他にも多くの恩恵があると思うので、防災教育を充実する観点からも大切だと考えることができる。震災学習スタディツアーでの貴重な経験から得たものを活かして、次代へと伝えていけるようにしたいと思う。

【私の一枚】

2月10日に訪問した大川小学校での写真です。中央の「未来を拓く」とは大川小学校の校歌の題名だと聞き、大川小学校や閑上の記憶、門脇小学校など震災学習スタディツアーで訪れた多くの場所での学びを、子どもたちや友達、家族に忘れず伝え、大きな被害が生まれないような未来を拓いていきたいと強く思います。



今、改めて見直したい防災教育の在り方

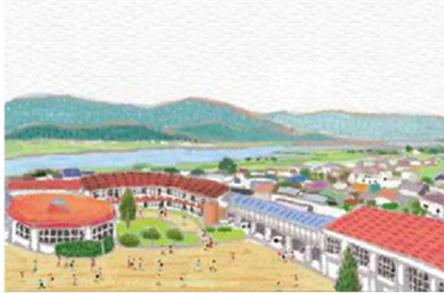
教育学部こども教育学科 2年 村山真菜

自然豊かな景色が広がる宮城県の名取市と石巻市を訪れ、震災当時のお話を伺い、大変貴重で学びの深まる3日間を過ごしました。

穏やかで温かい街並みからは想像することが難しいけれど、街のあちこちに慰霊碑や伝承館、防災マップが多く残されており、「東日本大震災を経験するまではここは津波の来ない場所だとずっと思っていた」という思い違いを改め、自然災害の恐ろしさや危機感を持つことの大切さを後世に伝えていこうという強い思いが伝わってきました。

今回の現地踏査を通じて、「地震が起きた際はすぐに情報を取り入れ、避難経路や手段を素早く判断し、高台へ逃げる」ことの重要性を一番に学びました。

大川小学校、門脇小学校の2校を実際に目にして、地震が起きたその時の決断によって被害の大きさも変わってきてしまうことを痛感しました。地形によって避難方法や避難場所も変わってくるけれど、日頃の避難訓練や防災学習を丁寧かつ真剣に行い、「自分だったらどう行動するか」を考えておけば、いざというときに自分の命や周りの人の命を救うことにつながるということを知りました。



また、私自身が「地震、津波」と聞いて想像していた物事と実際に目にしてきたこととではあまりにも違いがあることにも驚きました。そして、経験のないことを想像することは難しく、だからこそ油断してしまいがちなのだらうと感じます。

実際には大川小学校や門脇小学校では、窓ガラスや外壁等が割れて崩れ落ち、津波が天井に届いた後が残り、鉄筋が四方八方に折れ曲がっておき出しになり、地震火災によって教室が全焼してしまった様子がそのまま残されています。

自然災害がもたらす被害の大きさや恐ろしさを感じたことはもちろんですが、それと同時に、自然と共生していくには知識を得ること、地域住民と協力し合うこと、また先々を考えて行動し備えておくことの大切さも感じました。

【私の一枚】

大川小学校は川や海に囲まれた地にあります。

未来を拓く学びの場であるはずだった学校に対して、「なぜすぐ近くの高台へ避難しなかったのか。なぜこどもたちの声を聞き入れ、すぐに対応しなかったのか」。遺族の方々は、今も多くの疑問ややるせなさを感じて、当時から変わることのない辛い思いをし続けています。

復興により街並みは新しくなっても、「変わらない、変えられないものはまだまだある」という事実を、多くの人があるべきだと私は考えます。



震災学習スタディツアーに参加して

国際学部国際学科 2年 楠田寛人

私は2月の9日～11日に開催された大学の震災学習ツアー2023に参加して、宮城県の被災地を訪れました。ニュースなどでしか見たことがなかった東日本大震災の実態をこの目で確かめたかったので、参加を申し込みました。興味があった東北地方そのものにも行って見たかったのも、もう一つの理由です。

私がこの活動で1番印象に残ったのは、2日目に訪れた震災遺構・石巻市立大川小学校です。この学校は2011年3月11日の東日本大震災で起こった高さ8.6mもの津波にのみこまれたのだそうです。津波は川と陸から襲いかかり、児童74名と教職員10名が犠牲となりました。私は実際に現場を見て驚きました。そこには、のどかな風景の中にポツンと学校があり、津波の威力で盛り上がった床や底が抜けた床、ねじ倒された渡り廊下などが無残な形で残っていました。被災した校舎の中には、時計が3つ残されていました。いずれも15時37分前後で止まっており、津波が学校を襲った時刻でした。



私たちは、この震災で当時大川小学校に通っていた娘さんを亡くした只野英昭さんのお話を伺いました。お話の中で、石巻市教育委員会の震災に関する隠蔽や改ざんがあったということを知り、自分たちが罪から逃れようと子どもたちの証言をねじ曲げたという事実を初めて知りました。世の中にこの事実があまり知られていないのは残念です。学校の判断ミスにより、助かったかもしれない命が犠牲になった事を認め、真実を公表しこの悲劇を二度と繰り返してはいけないと思いました。



今回のスタディツアーで、貴重な経験を沢山することが出来ました。当時小学1年生で記憶がほとんどありませんでしたが、被災した現場を見学したことによって、災害の悲惨さをより知ることができました。私が住んでいる地域で地震はあります。だからこそ、今回の活動で得た経験と知識を活かしていかなければと思いました。

研修前は知り合いもいなかったのが不安だったのですが学年、学部を超えた知り合いができ、充実した3日間となりました。

【私の一枚】

2月9日訪問した、義務教育学校・名取市立閑上小中学校での写真です。こちらでは「千葉発祥・大学生が創ったパラスポーツを届けよう」プロジェクトの一環として、私たちの先輩などが考案したソフトパラフェンシングで、子どもたちとのパラスポーツ交流を実施しました。子供たちが楽しそうに活動している姿を見ることができ、とても嬉しかったです。



震災学習スタディツアーに参加して

国際学部国際学科 2年 仲野颯真

私はこの3日間、どの日も貴重な時間を体験させていただいたと思います。2日目は体調を崩して一日中ホテルで休養せざるを得なくなったのですが、この日の訪問地での体験談を仲間から聞くと、多少の体調不良を我慢してでも参加しておけばよかったと後悔しています。しかし1日目に体験したことだけでもとても良い経験ができたと思っています。



私がこのツアーに参加した理由は、実際に約13年前の震災を経験した人たちの話や被災地と呼ばれる場所は今どうなっているのかを知りたかったからです。実際被災した人の話を聞くとかなり衝撃的な内容でしたが、このような話はちゃんとした事実を知るべきだと思いました。しかし語り部として伝えてくださる方は、年が経つにつれてどんどん減っていき、やがてはお話いただける人たちがいなくなってしまいます。だからこそ、実際に話を聞いた我々が今後の震災の記憶がない人たちに、こういうことがあったのだということを伝えていき、このような悲しいできごとを忘れず語り継いでいかなければなりません。

このツアーに参加して、私は「悔いのない人生を送りたい」と思いました。この震災では、生きたくても生きられない人たちがたくさん亡くなりました。正直に言うと、このツアーに参加する前の私は、ただ時が過ぎるのを待ち、特に充実した生活を送っているとはいえませんでした。ですがツアー参加後は、どんなに辛いことがあっても最後まで生き抜きたいと思えました。被災で亡くなられた方たちの分まで精一杯生き、今を全力で生きたいと思えました。

敬愛大学が2011年の震災のあった年からずっと続けてきたからこそ、このような貴重なツアーに私も参加することができたということに、とても感謝しています。来年も必ず参加して、学びたいと思います。



【私の一枚】

初日の2月9日に、「閉上の記憶」(名取市)に訪れた際に、施設の屋外で撮った写真です。ガードレールが津波の水圧を受け、大きく変形しています。いかに津波が恐ろしいものかを身にしみて感じさせられました。



震災学習スタディツアーに参加して

国際学部国際学科 2年 星和歌子

地元の小学校の学童施設で単発のアルバイトをしていた時に、小学生に「東日本大震災ってなあに」と聞かれたことがあります。「今の子どもたちは東日本大震災を知らないのか」という驚きと、「どんな言葉で、どんな風に伝えるのが正解なのか」と思ったことがきっかけで、今回の震災学習スタディツアーへの参加を決めました。



2011年の震災が発生した時、私は小学校1年生で、小学校から下校している最中でした。母親が血相を変えて自宅から飛び出してきたこと、揺れが収まり自宅に戻ってつけたテレビには、何度チャンネルを変えようとも津波の映像が流れるばかりでとても怖くなったのを、今でも鮮明に覚えています。

丹野さんが「津波は黒い壁のよう」とお話をしてくださったのが、当時見た映像と併せて印象に残りました。2日目に訪れた門脇小学校には、押し寄せた津波の悲惨さを物語る黒板や、あの日児童や建物を守った防火扉が残されており、絶対に忘れてなるものかと目に焼き付けてきました。亡くなった大川小学校の子どもたちや先生方、閑上の街に住んでいた方々、門脇小学校の子どもたち、日和幼稚園の子どもたちがどんな怖い思いをしたのか、私には想像することしかできません。



大きなお金を寄付することは難しいし、学生である今の私にできることは、多くないかもしれません。それでも、あの日あった出来事を忘れないこと、後世に伝えていくことはできるのではないかと震災学習スタディツアーへの参加を経て強く思うようになりました。

3日目に閑上の町で購入したおにぎりは、閑上の海苔と能登のぶりをふんだんに使って作られていました。食べて支援することもできるので、「自分にできること」を模索しながら生活していきたいと思います。

20歳で初めて訪れた宮城県は、とても寒かったけれど、とても人があたたかいところでした。地域連携センターの藤森さんやドライバーの小原さん、宮城県で出逢った方々のご協力に感謝の意を述べるとともに、また必ず訪れようと心に決めました。

【私の一枚】

震災学習スタディツアーの2日目、2月10日に訪れた大川小学校で撮影した写真です。凍てつくような寒さ、鮮明に印象に残る青い空、学校では学んでこなかった被災地の実態。これから大学を卒業して就職しても、年を重ねておばあちゃんになっても、この場所から見た景色は絶対に忘れないと思います。



「ひと」から「ひと」へ

経済学部 1年 稲村優希

あの日はいきなり起きました。誰もがあの日、こんなことが起こると思わなかったでしょう。何も変哲もなく、普段の生活をしていた時に、地震と津波が起きました。ここで私が言いたいのは、「いつ」「どこで」地震や津波が起きるか分からないということです。もしかしたら、それは今かもしれません。現在の地球の状態を見ると、「昔」と「今」とでは大きく違い、歯止めがかからない状態で地球温暖化が進行し、環境が変化しています。「ここは大丈夫」と思っている、それは過去の話であり、今の話ではありません。こういった時のために、日頃の生活から震災への対策が必要です。私は将来、社会科の教員を目指していますが、人の命を預かり1秒でも無駄にできない場面で、とるべき行動を一から考える時間はありません。むしろ考えているうちに地震や津波がきて、本棚などに下敷きになったり、建物倒壊に巻き込まれたり、火災が発生したり、津波に巻き込まれたりすると被害が相次ぎ、多くの犠牲者が出ることになります。



「大川伝承の会」の只野英昭さんや「閑上の記憶」の丹野祐子さんのお話を伺い、また各地で展示資料などを見せていただきながら、例えば真実をもみ消す行為を行ったり、救えた命を見捨てて逃げたりといった出来事に胸が締め付けられました。家族や友人を失った方々の気持ちを軽い気持ちでは言い表せませんが、「あなたは、大切な家族や友人を失った方の気持ちを理解できますか」と問いかけてみたいと思いました。

ました。

今回多くの方々から聞かせていただいた貴重なお話を、将来教壇に立った時に震災を知らない世代に伝えたいと思います。そして震災の恐ろしさだけでなく、日頃から備える大切さを伝え、避難や対策の成功事例だけでは、二度と救える命を無駄にしないよう失敗事例も伝えていくことに重視した防災教育をとりいれた授業を展開していきたいと思います。

【私の一枚】

2月11日に訪問した、名取市閑上にある日和山の写真です。山の上から周囲を見渡すと、この街に沢山の日常や、震災の恐怖や迫を感じずにはられません。穏やかな海風が吹き気持ちがいい場所ですが、沢山の尊い命が奪われた場所でもあります。



震災学習スタディツアーに参加して

経済学部 1年 黒田一輝

東日本大震災から13年、私は震災発生後から今回のツアーに参加するまで、被災地をテレビやインターネットの映像でしか見たことがなく、東日本大震災について詳しく知ることはありませんでした。そこで、震災について詳しく知りたいと思い、今回の震災学習スタディツアーへの参加を申し込みました。



1日目は稲毛から宮城へバスで向かいました。途中、福島第1原子力発電所の近くも通りました。揺られること約6時間、私は人生で初めて、「被災地」宮城へ足を踏み入れました。最初に名取市の閑上小中学校を訪れ、小学生とパラスポーツ交流を行いました。閑上小中学校は、別々にあった小学生と中学校が統合され、義務教育学校として新たに開校したのだそうです。ここでは、震災の教訓をいかし、工夫された校舎や避難経路の確立などがなされました。

次に閑上の港に近い、一般社団法人閑上の記憶という施設を訪れました。ここでは代表の丹野祐子さんからお話を伺いました。丹野さんはお子さんを1人、震災で亡くしている被災者の一人ですが、当時のお話を詳しくしていただきました。



2日目は、84名という多くの尊い命が失われた大川小学生を訪れました。こちらでは、只野英昭さんからお話を伺い、失われなくてもいい命があったことを学ばせていただきました。午後には門脇小学校を訪れ、鈴木洋子先生からお話を伺いました。震災当時校長先生だった鈴木先生は、震災当時のことをとてもわかりやすく説明してくださいました。門脇小学校の近くにある、日和幼稚園遺族有志の会が建立した

慰霊碑にも立ち寄り、みなで献花をし、手を合わせました。

3日目は月命日の11日。名取市震災メモリアル公園の「芽生えの塔」の前で献花し黙祷を捧げ、閑上の街での自由踏査を実施しました。

今回の学習で改めて震災の恐ろしさや、避難訓練の大切さなどを実感することができ、多くのことを学ぶことが出来ました。

【私の一枚】

月命日である2月11日に訪れた、名取市の震災メモリアル公園です。この慰霊碑は、震災により犠牲になられた方が天に昇っていくイメージを表しており、復興の願いを込めた「種の慰霊碑」から発芽した「芽生えの塔」は、上へ上へと伸びていく姿を表現しています。震災当時にはこの芽生えの塔と同じ高さの津波が押し寄せたそうです。



震災学習スタディツアーに参加して

経済学部 1年 芳賀寿也

2011年3月11日に起きた東日本大震災、あれから13年経ち現在の宮城県は大震災から起きて少しずつ建物や学校、そして住宅といった街並みが元に戻っていて、新たな環境へと変化したと考えられます。当時6歳（東日本大震災の被害に起きた日）だった私は、千葉県酒々井町に住んでいて近くに海や山がなかったため自分の地域は地震のみ被害に起きました。津波や火災、土砂崩れといった大きな影響は全くありませんでした。

今回、震災学習スタディツアーに参加したきっかけは現在住んでいる千葉県と宮城県との共通点は一体何かを考えるためにこちらの震災に参加しました。将来、公務員を目指す私にとって地域に関するお仕事の繋がりになるのではないかと考えたため参加を決意しました。最初は何も分からないまま震災の当日までに何も調べていないことに気づいたためどうしようと不安でいっぱいでした。しかし、現場で説明を伺った職員さんや校長先生の当時の出来事についてのお話を聞いたことで自分の立場が180度変わりました。今回これまでに経験のないものこの目で見ることができました。



千葉県と宮城県との地域に関する課題で最も重要だったのは地震や津波がいつ起きてもおかしくないように避難できる場所を確保することが一番の地域課題であると考えました。

きっかけは二日目の門脇小学校に訪問した鈴木洋子先生のお話を伺ったことで当時、東日本大震災が起きた後の学校の状況や施設だけでなくこれから地域を守るためにどのような対策が必要になるのかを気づかせてくれました。身の回りの地域が避難できる場所は学校の体育館やスーパー、ショッピングモールなどといった施設があり地震や津波にも避難できる場所を確保することが大切になります。

自分にとって貴重な経験をすることができたことにとっても感謝しています。この震災がこれからの就職活動へ活かせるように取り組んでいこうと考えています。

【私の一枚】

2月10日に訪問した門脇小学校での写真です。当時、津波と火災の影響で学校全体の教室だけでなく、廊下や職員室といった施設もすべて崩壊されたという情報を聞きました。津波と火災の影響で起きた学校は取り壊しの作業を行わず、そのまま学校を残すことを当時校長先生の鈴木洋子先生からのお話を伺ったこととなります。



震災学習スタディツアーに参加して

千葉敬愛高等学校 1年 小坂紀希

今回初めて、東日本大震災で被害に遭った場所に行き、13年前に何気ない日常が奪われ何が起きたのか学びました。

1日目の閉上の記憶では、中1の息子さんを亡くした丹野祐子さんのお話を聞きました。地震が起きた時、街の人たちは皆、「津波なんかこないから大丈夫」と安心していただけです。そのため、丹野さんも息子さんに電話をし、「津波なんかこないから大丈夫だよ」と伝えたそうです。しかし、津波は街全体を襲い、息子さんは亡くなってしまいました。今だから津波は怖いとわかっていますが、当時は、津波は意識されていませんでした。自分は住んでいるところも生活しているところも内陸だし、流石に家に津波はこないだろうと考えていました。ですが、丹野さんのお話を聞いて変わりました。地震が起きた時、家にいるとは限らない。学校、旅行先、嫁いだ先が海沿いかもしれないと様々なケースが思い浮かびます。いつどこで起きても避難ができるよう、日頃から避難経路を確認することが大切だと感じました。



2日目の午前中の大川小学校や門脇小学校では、13年前の当時のまま建物が残されていて、驚きを隠せませんでした。参加する前は、お話を聞き、資料を見るだけかと思っていましたが、まさか当時のまま建物や教室が残っているとは思いませんでした。大川小学校でも閉上と同様、津波は来ないと言われていました。しかし実際には津波は来て、84人もの命が奪われました。津波到達まで50分あったのになぜ学校の裏にある山に避難しなかったのか。なぜ、避難しようとした子どもたちを呼び戻しグラウンドでずっと待機したままだったのか、様々な疑問が浮かんできます。私は只野さんのお話を聞いて、初めて人の話で手が震えました。日常が津波や地震によって一瞬にして奪われ、「行ってきます」が最後の言葉になり、ただいまが聞こえない。このスタディツアーでの最大の学びは、ひとつとではないということ、そして震災のことを忘れず、次の世代に受け継いで行かなければいけないということでした。

【私の一枚】

これは門脇小学校の当時、鈴木洋子さんが使っていた校長室の写真です。津波火災の爪跡が当時のまま残っています。真ん中の金庫の中には卒業証書が入っていて、津波が落ち着いた頃にバーナーで開けると、汚れ一つない卒業証書が中にありました。私はこれを聞いてとても感動し印象的でした。



震災学習スタディツアーに参加して

(引率者) 経済学部 専任講師 脇黒丸新太郎

東日本大震災の当時、高校3年生であった私が今年から教員として働く身になったことから、大きな時間の流れを感じる。当時、実家の福岡にて揺れを全く感じないまま、ニュースから流れてくる悲惨な映像をまるで壮大な映画を観ているような気分で、自分事で捉えられていなかった。東北地方へは震災後、何度か訪問したことはあったが、今回のような資料館や語り部の方の話を直接伺う機会はなかったため、まさに今回はじめて震災を自分事として捉える機会を頂いた。

多くの方からのお話を聞く中で、未だになぜあの時こういう行動や言葉が出来なかったのか、という後悔を少なからず抱えながら過ごしてきた12年間だったのだと知った。当時、今のようにSNSなどは発達していなかったとしても、高いところに早く逃げる、周りの人のことよりも何よりも逃げる、避難場所や高所はどこか、といった今となれば当たり前の情報を日ごろから頭において生活できていれば、と悔やんでいる人の言葉はとても重かった。泥を被ったままのノートや筆箱などの遺品を懸命に探したという言葉聞きながら、幸せに生きていた子どもがある日突然いなくなってしまったご家族の途方もないやるせなさを感じた。また、過去の惨事からの石碑が示すような教訓を忘れ、閑上は大丈夫だ、と信じこんでいた、まさか津波が来るなどは夢にも想像していなかった、とおっしゃっている言葉を聞き、まさに自分事としてとらえていなければ、人は簡単に都合の良いように解釈してしまうのだと改めて感じた。あれだけ海岸からすぐのところに住んでいても、自分が恐れとして認識していないものに対しては対処法や解決手段を考慮することは難しかったのだと思う。未曾有の大震災だから、仕方なかったという意見もある意味では正しいように思う。

しかし、そこから学びを得ないままで良いのだろうか。いや、そんなことあってはならないと強く感じる。今回のツアーを通じて学びを得たうえで、これからの時代を生きていく私たちには、少なくとも経験と知恵がある。ちょうど年始の能登震災のときに、NHKのアナウンサーが、「東日本大震災を思い出してください、とにかく高台へ逃げろ」という緊急の放送をしたことからもうかがえるように、震災からの学びを確実に現在に活かす場面はこれからも出てくるはずである。そのときに、後から後悔をしないためにも、今回のスタディツアーで学んだことを自分事にしなければならぬ。そして、その経験を確実に次の世代へと引き継いでいかなければならないということを強く感じた、そんなツアーであった。

このようなツアーを企画していただいた藤森様を含め、多くの関係者の方に深く御礼申し上げたい。

敬愛大学 震災学習スタディツアー2023 参加者

(参加学生)

経済学部	1年	稲村 優希 黒田 一輝 芳賀 寿也	
国際学部 国際学科	4年 3年 2年	澤木 翼 市田 ゆり奈 内海 愛展 飛田 萌子 楠田 寛人 仲野 颯真 星 和歌子	
国際学部 こども教育学科	4年	大野 実咲 菊池 七海	
教育学部 こども教育学科	3年 2年	久保田 大介 土居 真理 中山 隼 藤本 治美 藤森 朋幸 三浦 遥星 若山 遥樹 小野 美智子 加藤 凜花 城之内 妃奈乃 林 香菜子 村山 真菜	(報告書未提出)
千葉敬愛高等学校	1年	小坂 紀希	

(引率教職員)

地域連携センター センター長	藤森 孝幸
経済学部 専任講師	脇黒丸新太郎

震災学習スタディツアー2023 活動報告書

令和6年3月29日 発行

発行人 中山幸夫

編集人 藤森孝幸

発行所 敬愛大学地域連携センター

〒263-8588 千葉県千葉市稲毛区穴川1-5-21

電話 043-251-6364(直) ファックス 043-284-2261(直)



今年度参加した学生たち。名取市閑上に停めた敬愛大学バスの前で撮影しました。
3日間の名取市、石巻市での現地踏査を終え、稲毛に戻る前のひととき、一人ひとりの学びが溢れんばかりの笑顔です。
本学からこれまで参加したのべ350名を超える学生たちと共に、これからも「語り継ぎ」を続けてまいります。

UD FONT 本冊子には、見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。